中村学園大学短期大学部「幼花」論文集
Vol.4 (2012), Page 19 - 28.

人間の心理について

浅田 彩希　　香月 美佐都　　木下 憂維　　手塚 美咲
中村学園大学短期大学部幼児保育学科

概要

私たちが生活している現代社会では核家族の問題や少子高齢化問題、熟年離婚問題や女性の社会進出などの生活形態の変化、インターネットによる情報の氾濫や環境問題など様々な社会問題を抱えている。そこで、本研究では喜怒哀楽をテーマとして人間の感情や身体への影響を調べると共に、男女の心理をテーマとして男女の考え方や感じ方の違いを比較することにより、人間の心理について明らかにしていく。

1 章　喜怒哀楽

人間の心理には大きく分けて喜怒哀楽があり、これらの感情は様々な場面において人に影響を及ぼしている。そこで、この章では感情が人に及ぼす影響において、心理的な影響や身体的な影響について紹介すると共に、病との関わりや子ども絵の影響について考察していくことにする。

1.1 節　喜

ヒトの赤ちゃんはよく泣いて、よく眠って、よく微笑むが、こうしたヒトの赤ちゃんの表情は生後間もない新生児期によくみられるので「新生児微笑」と言われている。それは、赤ちゃんの気持ちが反映されているものではなく、単に筋肉がゆるんで起こる反射的な反応のひとつだと言われており、生理的微笑とも呼ばれている。また、ヒトにしかないと考えられていた「生理的微笑」がチンパンジーにもあるということが近年明らかとなった。実際に、チンパンジーの子どもの微笑みに着目して生後４ヶ月頃まで観察していくと、特別な意図をもたない「生理的微笑」は見られなくなり、何かの刺激や誰かに向けた「社会的微笑」が増えてくる等、新生児期以降の微笑みの発達もヒトとチンパンジーでよく似ているのである。勿論、研究で明らかになったことは共通点や類似点だけではなく、子どもの微笑みに対する母親の反応に決定的な違いがあることがわかった。例えば、ヒトの場合は子どもの微笑みに接した母親は頬がゆるみ、まるで伝染したかのように微笑むが、対してチンパンジーの場合は子どもの微笑みを見て母親が微笑むという場面は一度も観察されなかったのである。すなわち、ヒトはチンパンジーに比べてとても早い時期から豊富で多様な「微笑み」を介したやりとりを始めているのである。

このような研究からヒトに特有な親子のやり取りは対面場面の豊かさや声かけによる交流であることが明らかとなり、よって、ヒトは常に「しがみつき抱きしめる」かわりに、生後すぐから微笑みや声かけによる交流を深めていくことが大切なのである。

1.2 節　喜～ポジティブ感情とネガティブ感情～

人の感情の中に、元気で活動的な生き生きとした状態であるポジティブ感情と元気がなく消極的で自分や周りのことに否定的なネガティブ感情というものがある。

ポジティブ感情は我々の幸せや幸福感、と関連しており、ポジティブな誘意性と高い活性化(覚醒感)によって特徴づけられた情緒的な状態のことであり、高い覚醒感をともなう快感情を目指す。具体的な感情としては、幸せ、喜び、満足、興味、愛などを挙げることができる。機能的にみる

お問い合わせ先：〒814-0198　福岡市城南区別府 5 丁目 7-1　中村学園大学短期大学部
幼児保育学科 橋本弘治研究室 mail:hashimot@nakamura-u.ac.jp

とポジティブ感情は特別な行動とは結びつかず、注意を広め、全体的な認知や処理を高めると考えられている。

ネガティブ感情には、怒り、悲しみ、恐れなどがある。「怒り」は攻撃行動に伴う感情であるというように、ネガティブ感情は行動との関係が明確である。また、機能的にみるとネガティブ感情は、注意を狭め、局所的な認知や処理を高めると考えられている。

伝統的な精神的健康観においては、自己や現実世界に対する正確な認知が、精神的健康を維持するために必要不可欠な要素であると考えられてきた。この考え方は、今日も、主に人格心理学・臨床心理学の領域において広く支持されている。

この考え方に対し、主に社会的認知の領域において、人間の推論・意思決定・判断などのプロセスは、事前の期待や自己奉仕的な解釈によって歪められることが明らかになってきた。普通の人(主に非抑うつ者)が有している自己・環境・未来に対する認知は、自分に都合の良いようにポジティブな方向に傾いたエラーやバイアスによって特徴づけられると指摘した。このようなエラーやバイアス、つまり「現実の様相を誤って解釈したものであったり、何か想像されたものであったりする、偽りのメンタルイメージや概念」を総称してポジティブ幻想と名づけた。これが「幻想」と名づけられているのは、単なるエラーやバイアスよりも普遍的・持続的・体系的なものであるとされるからである。単なる楽観主義とは異なり、自己のことのみに関わっていること、そして、結果を漠然と期待するのみにとどまらず自分の能力によって望ましい結果を生み出そうという信念であるということが指摘されている。

1.3　怒

現代の子どもの問題として、「不快」感情の対処能力の低下とそれらの感情を曖昧なものとしてしか体験できないことが挙げられている。但し、ここで言う感情とは「内的または外的な刺激によって引き起こされる、全体的な心身の状態のこと」である。また、感情を曖昧なものとしてしか体験できないということは、心身の状態も曖昧なものになっている可能性があり、子ども達は「怒り」を自分の感情として体験できていないことが懸念される。すなわち、子どもが怒りを表せないことは人格形成や精神的健康に重篤な影響を及ぼし、その結果、怒るべき場面でも怒りを抑制することで自分自身の気持ちに気づけなくなることが指摘されているのである。

このように、子どもの「怒り」は人間の発達過程においても重要なテーマであり、多くの研究が行われている。例えば、子どもの怒り感情に関する研究において子どもの感情は母親の感情特性に影響を受けると言われている。具体的には、否定的な感情が高く、感情が不安定な母親を持つ子どもは相手の否定的な感情を気にして自身の感情を表出することに葛藤を抱くが、攻撃されたり、自分が侵害されるような時は怒りを表すことがある。それに対して、全体的に肯定的な感情が高く、否定的な感情をあまり感じない母親を持つ子どもは内向的で受動的であり、理性より感情の方が優位となるのである。

ここ数年の文部科学省調査によると、いじめは減少傾向、不登校は横ばい傾向にある。しかし、暴力件数は増加傾向にあり、特に中学生が最も多い状況となっている。このような背景の１つとして、中学生の感情や行動のセルフコントロールの低下が指摘されている。中学生は発達的観点から見ると、身体的・精神的変化が著しく、友人関係、両親や学校への反抗心を通して自己同一性を模索する時期であり、不安定で自分をコントロールすることが難しい時期である。例えば、ある研究者は感情の発達について、「子どもは体からあふれ出してくる漠然としたエネルギーを適切な言葉で表現することを学び、対人関係を築き、また、成長発達に段階に応じたコントロール力を身につけるが、それを知的にコントロールすることができなくなると爆発させてしまうことになる」と指摘している。このように、怒りの感情をコントロールできなければ非社会的行動へと繋がり長期の支援が必要となる場合もあることから、怒りの感情をコントロールする為にリラ

クセーション法（深呼吸）が必要だと考えられている。

1.3 節　哀

私たちが普段流す涙には三種類のものがある。それは、常に眼球に流れている基礎分泌としての涙、異物が刺激して流れる反射性分泌としての涙、そして、喜怒哀楽によって流れる情動性分泌としての涙である。

涙の中で唯一脳からの刺激で出るのが情動性分泌の涙である。具体的には、人は前頭前野で悲しみを感じるとその信号を上唾液核に送り、自分の意志とは無関係に涙腺を刺激して流す涙のことである。また、情動性分泌の涙には自律神経を調節する作用がある為、泣くことはストレスを発散させることに効果的である。

涙以外にも体に影響するものがある。伝統的中国医学では七つの感情が身体の状態に良くない影響を与えると考えられており、これを「七つの悪魔」と呼んでいる。七つの感情とは、喜び、怒り、哀しみ、悲嘆、憂い、恐れ、驚きである。その中で哀しみが過ぎると肺を傷つけ、憂いがすぎると脾を傷つけると考えられている。すなわち、溜息ばかりして気分が落ち込み、元気がなくなると、免疫力が低下して風邪や感染症にかかりやすくなり、思い悩むと食欲が無くなり身体の働きが低下して、痩せていくか、下半身中心にむくんでしまうと考えられているのである。

これらの教訓には、私たちは生きている限り何らかの感情を発生させており、そのエネルギーレベルがストレスを感じない程度のものや変動の様相が通常の範囲内であれば健康には問題ないが、その範囲を超えてアンバランスな状態になったり、常に同じエネルギーの波を発生させているとそのエネルギーに影響を受けやすい臓器に問題が生じてくる。自分でも気付かないうちにその臓器によくないエネルギーをため込むこととなるというものである。

一方、日本では高齢化社会の問題や核家族化の問題が深刻化しており、最近深刻化している問題としてうつ病が挙げられている。うつ病の原因としては、遺伝だけでなく悲しみや孤独感が原因の一つとして考えられており、以前であればうつ病になりやすい性格というとまじめで几帳面、何事にもこつこつとやつタイプが挙げられていたが、最近では明るく活発な人でもリストラや対人関係での悩みが高じたりするとうつ病になってしまうことがある。すなわち全ての人がうつ病になる可能性があるといっても過言ではなく、ストレスに心が耐えられなくなる時、立ち止まって開き直ることも大切なことである。

1.4 節　楽

生活習慣と病気には様々な関係があり、現在日本人の生活習慣病予防についての研究が進められている。その中で喫煙や運動のような生活習慣に加えて、ストレスや怒りの感情、イライラしやすい性格等の心理的な要因が健康に悪い影響を及ぼすことが分かってきた。しかし、逆に嬉しい、楽しい、面白い等の気持ちや楽天的な性格傾向等、ポジティブな心理要因が疾病の発症や死亡に与える影響についてはあまり研究されていない現状である。そこで、生活を楽しいと感じるポジティブな意識が循環器疾患の発症や死亡にどのような影響を与えるのかを「ご自身の生活を楽しんでいると思われますか？」というアンケート調査結果を用いて生活を楽しんでいる意識と循環器疾患との関係について考察していくことにする。

はじめに、生活を楽しんでいる意識と循環器疾患の発症について調べたところ、男性では生活を楽しんでいる意識が高いグループに比べ、中程度のグループの循環器疾患発症のリスクは 1.20 倍、低いグループでは 1.23 倍高いという結果であった。次に、生活を楽しんでいる意識と循環器疾患による死亡について調べたところ、男性では生活を楽しんでいる意識が高いグループに比べ、中程度のグループの循環器疾患死亡リスクは 1.15 倍、低いグループでは 1.16 倍高いという結果

であった。また、循環器疾患の発症も死亡も共に、女性では特に関連は見られなかった。これらの結果から、生活を楽しんでいる意識を持つことが男性において循環器疾患の発症、死亡のリスクの低下に影響を及ぼすことが考えられる。しかし、同様の傾向は女性では認められず、ストレス源に対する対処の方法や自覚されたストレスが心身に与える影響が男女で異なることも報告される等、男女差に関するメカニズムは今後さらに研究の必要性があると考えられている。

次に、アルコールがもたらす楽しさについて考えていく。お酒を飲むとふんわりと気持ちが軽くなり、それまでの疲れやストレスに凝り固まった心も解れる経験が誰にもあるだろう。このような楽しさを導き出すのは、アルコールによって脳が麻痺するからとこれまでは捉えられていた。しかし、現在はもう少し違ったアルコールの作用が解かっている。具体的には、アルコールを飲んで楽しい気分になる理由は脳内で楽しさや心地よさといった感情を生み出す「ドーパミン」という神経伝達物資の分泌が促される為である。ドーパミンは「楽しい」と感じる時に分泌される脳内物質であるが、アルコールによっても分泌が促されるのである。また、ドーパミンが分泌されると「楽しい」という感情を抑制して興奮しすぎるのを防ぎ、気持ちを平静に保つための脳内物質である GABA 等も分泌させる為、アルコールは気持ちを平静に保つ脳内物質の分泌を抑えたり、その働きを鈍らせたりすることで気分は益々盛り上がるのである。更に、アルコールは気持ちを高揚させるドーパミンの分泌を促す一方でセロトニンの分泌を促す作用もある。セロトニンは過剰な動きや不安、恐怖といった感情を抑え、気持ちを鎮静化させる為に働く脳内物質であり、ストレスを抑え、うつ病の治療にも利用されている。しかしながら、アルコールがドーパミンの放出に影響を与えるのは最初の 20 分だけとも言われており、飲酒は脳のことを考えて適量を守ることが大切なのである。

2 章　極限の心理

人質事件の被害者が加害者に好意や恋愛感情を抱いてしまうストックホルム症候群や災害時等の緊急事態に無思考状態、混乱して優先すべき行動が分からなくなる Emergency spell（非常呪縛）等、人は極限状態に陥ると思いもよらない思考や言動をとることがある。そこで、この章ではそのような極限状態になった場合、身体や精神に及ぼす影響について考えてると同時に、法律的解釈については考察していく。

2.1 節　正当防衛について

初めに、日本とドイツの正当防衛の法律的立場を紹介する。

1．日本における正当防衛

刑法

第 36 条(正当防衛)

①急迫不正の侵害に対して、自己又は他人の権利を防衛する為、やむを得ずにした行為は罰しない。

②防衛の限度を超えた行為は、情状により、その刑を軽減し、又は免除することができる。

＜過剰防衛の法的性格＞

過剰防衛の場合は、違法性は阻却されずに、任意的な刑の軽減又は免除にとどまる。この根拠については学説の争いがある。

Ⅰ責任減少説

防衛行為の様な、緊急事態のもとでの行為は、精神の動揺のため、過剰になったとしても、強く非難できない場合があることを根拠に、責任が減少するとする。

Ⅱ違法・責任減少説
過剰防衛の場合でも、正当防衛の場合と同じく、急迫不正の侵害が存在するので、違法性が少なく、また、責任が軽い場合もありえるということを根拠に、違法性及び責任が減少するとする。

2．ドイツにおける正当防衛
ドイツ刑法典
第 32 条(正当防衛)
① 正当防衛によって必要とされる行為を行った者は違法に行為をしたものとはならない。
② 正当防衛とは自己又は他人を現在の違法な攻撃から回避させる為に必要な行為である。

第 33 条(過剰防衛)
行為者が錯乱、恐怖又は驚愕から正当防衛の限度を超えたときは、行為者は罰せられない。

以上からすると、日本とドイツとでは、条文の内容に違いがあり、同平面の議論ができないが、「正当防衛の認識」の内容について、日本とドイツとでは、大きな相違がみられる。

2.2 節　白髪について

フランスの王妃、マリーアントワネットは処刑を前に一晩で毛髪が真っ白になったと伝わるように過度のストレスから一晩で毛髪が変化した、という話を耳にすることがある。このように、心理的なダメージは髪の毛に表れることが多いと言われている。しかし、髪の毛の色のもとはメラニン色素であり、頭皮にあるメラノサイト（色素細胞）で生産され、毛髪をつくる毛母細胞へと受け渡される。

白髪のメカニズムは、老化など様々な要因でメラノサイトがダメージを受け、細胞が死んでしまうか、メラニン色素をつくる能力が弱くなった場合に毛母細胞にメラニン色素が供給されなくなるため白髪になるというものである。また、毛髪はもともと死んだ細胞であり、そこに含まれるメラニン色素が分解されたり移動したりすることはない。したがって、現代科学では人工的に漂白しない限り、黒髪が一気に白髪になることは考えなれないのである。しかしながら、インターネットの掲示板やブログ等には、以下のような実例が載せられていた。

1．住んでいた所から遠く離れた土地で長期間の出張をしていた女性は帰宅前日の朝に生え際が真っ白に変化していることを発見した。全ての髪の毛が白く変化したわけではないが、前日までは黒かった大量の髪の毛が白く変化していた。さらにこの女性は赤く変化した髪の毛も発見した。帰宅し、数日たつとほとんど黒い髪の毛に戻っており、二週間が経過すると完全に元のままに戻っていた。女性が美容院でそのことを話したところ、「個人差はありますが、割とよくある話ですよ。」と言われた。
2．夫が病気で倒れた女性は、心配のあまり一晩で半分以上の髪の毛が白髪に変化した。夫が回復した後も女性の白髪は元に戻らなかった。更に、白髪がすこし見えているくらいだった 50 代男性は、母親の危篤で一晩にしてほとんどの髪の毛が白く変化した。この男性も白髪は元に戻らなかった。

その他にも出産を期に短期間で白髪が増えるという例もあった。このような実体験が真実であれば科学や医学では説明できないだけで「絶対にありえないこと」ではないのかもしれない。

2.3 節　PTSD について

PTSD の研究の中の一つに砲弾神経症（シェルショックともいう）戦闘ストレス反応がある。この研究は第一次世界大戦における塹壕戦の経験を踏まえ、戦後米国と英国から始まり、ベトナム戦争後に頂点を極めた。戦闘ストレス反応は、戦争において精神的に崩壊する兵士が驚くべき多数に上ったことから認知されはじめた。

具体的には、友人たちの手足が一瞬にして吹き千切れるのを見て、閉じ込められ孤立無援状態に置かれたり、一瞬にして吹き飛ばされ殺されるという恐怖から気を緩める暇もないという状況が驚くべき現象を生み出したのである。兵士たちはヒステリー患者と同じ行動をし始め、金切り声ですすり泣き、金縛りで動けなくなり、その後、感情が麻痺して無言・無反応となり、健忘が激しくなった。これらの兵士に対して、軍は臆病者であると結論して、処罰と脅迫による電気ショック治療を提唱した。一方、進歩的なものはこれを士気の高い兵士にも起こりうる精神障害であると人道的治療を進め、その後の調査の過程でこれらの一部の状態に対して ASD(急性ストレス障害)や PTSD という名称がつけられたのである。

PTSD に関する多くの研究や発展は戦闘帰還兵を対象にしたものであり、最も頻度の多い市民生活の中での性的暴力や家庭内暴力には認識がなかった。近年では、家族という密室を隠れ蓑にして幼少時から長期に渡り親をはじめとした大人たちから受けるさまざまな形の児童虐待が遥か後年に成人してから多様な症状を生じさせることが発見され、PTSD の一種として検討されるようになり、ジュディス・ハーマンは「複雑性トラウマ（complex trauma）」、ヴァン・デル・コルクは「複合型トラウマ」（combined-type trauma）という概念を提示している。

3 章　男女の心理について

「どこからが浮気だと思いますか？」と問われた時、浮気と感じるのは人それぞれであるが、その中でも男性と女性での考え方や心理が異なることは当然のことである。そこで、この章では浮気や結婚後の男女の心理の違いについて考察すると共に、独自のアンケート調査結果を紹介することにする。

3.1 節　浮気の心理

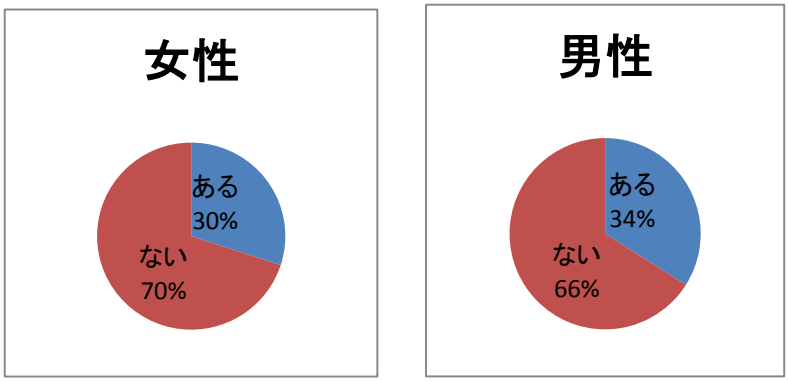
男女の浮気の心理には当然ながら違いがあり、特に男性が浮気に走る要因として女性の体目的であると予想されている。すなわち、性的魅力を感じると彼女や妻がいてもあまり深く考えずに、体の関係だけを目的に浮気の衝動に駆られるのである。よって、体の関係が終われば全く罪悪感を感じることなく別れることもできるのである。しかしながら、女性の浮気は男性とは異なり、本気であり、男性のように体目的で浮気はしないのである。すなわち、本気で相手の男性の性格や魅力に惹かれ浮気をすることから、女が浮気すると心が戻り辛いとう特徴があるのである。このように、女性の心理としては相手の男性に不満を持つと他の男性に目が移り、他の男性としかくして、男性に魅力を感じれば浮気に走るのである。

女性に浮気させない為に注意することは例えば、彼女に寂しい思いにさせないことや積極的に彼女と会う時間を作る等、様々である。確かに、浮気相手の経済力に惹かれて浮気する女性がいることも事実であるが、寂しさのあまり近くにいる優しい男性と浮気する場合が殆どである。

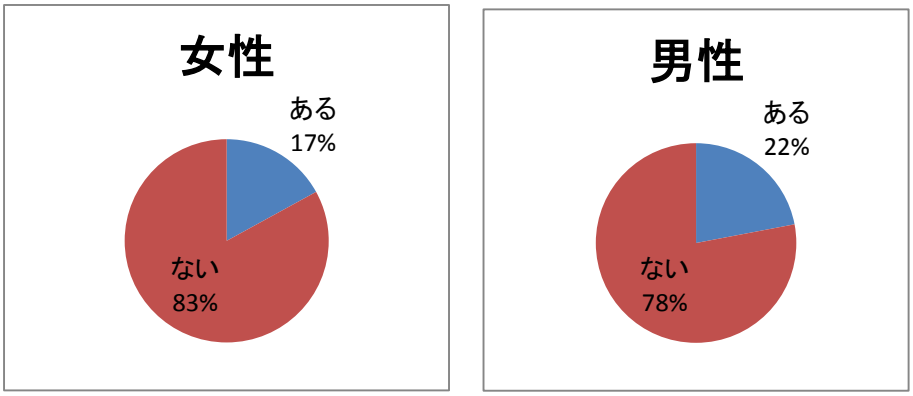
3.2 節　アンケート調査結果

福岡市内の大学において、18 歳から 22 歳の男女各 100 人にアンケートを実施した結果を以下

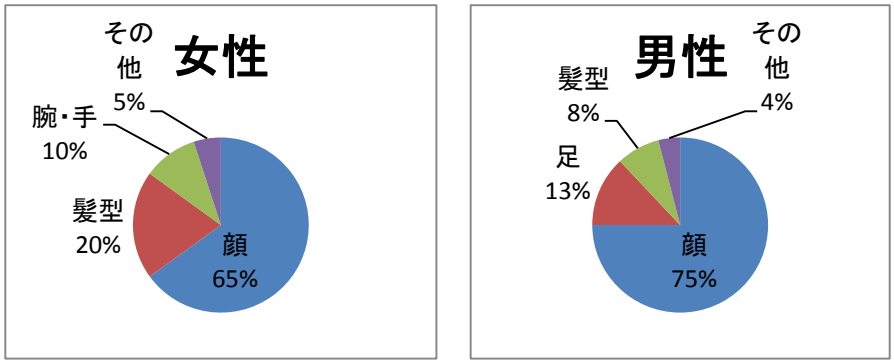
に示す。但し、アンケート内容は Q1 浮気願望はありますか？Q2 浮気の経験はありますか？Q3 異性と出会ってまず最初にどこを見ますか？の 3 つであった。



Q1 浮気願望はありますか？



Q2 浮気の経験はありますか？



Q3 異性と出会ってまず最初にどこを見ますか？

Q1：浮気願望はありますか？については、男性の方が‘浮気願望がある’というのはあくまで、イメージであり、実際は男女の差はあまり無かった。

Q2：浮気の経験はあります？については、男性の方が、女性に比べて、多少ではあるが経験した

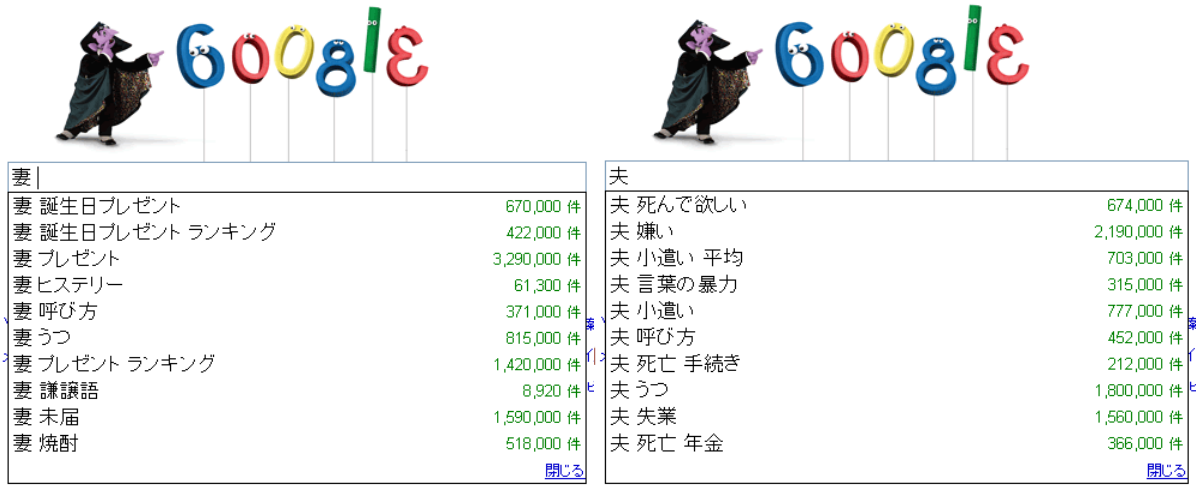
ことがある人が多かった。

Q3：異性と出会ってまず最初にどこを見ますか？については、男性も女性も過半数の人たちが‘顔’と答え、その次に女性は髪型、腕・手と上から下に向かってみていることが分かるが、男性は顔から一番離れている足を次に見るということから、いかに足に興味を持ち意識して見ていることが分かる。

Q4：地図を見ることが得意ですか？については、男性は「はい」と答えた人と「いいえ」と答えた人の割合は半々であったが、女性は「はい」と答えた人は 3 割、「いいえ」と答えた人は 7 割であり、男性は女性より地図を見ることが得意と言える。

3.3 節　結婚後の男女の心理の違いと世界の離婚率

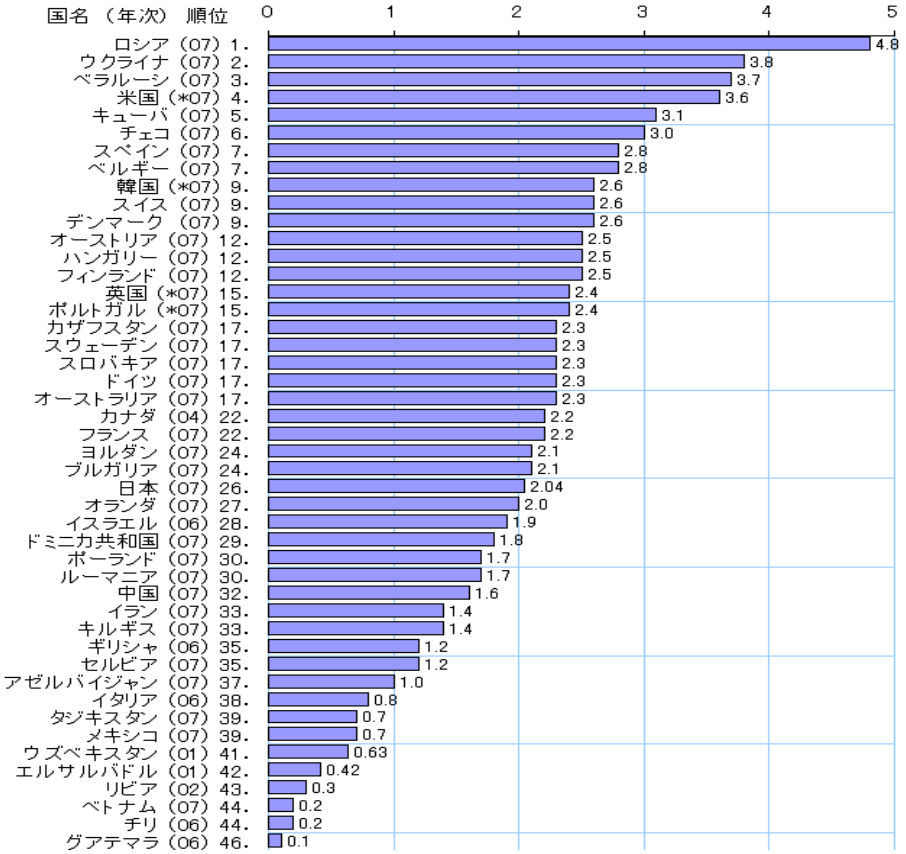
男女の心理の違いは様々であるが、結婚後の夫婦の間でも考え方や感じていることは大きく違っている。次の図は Google の検索結果であり、「妻」と「夫」とキーワードを入力したあとに予測される選択肢である。



この検索結果は夫の妻への気持ちと妻の夫への気持ちが表れている。図の中で一番検索数が多いのは、「妻」では「妻　プレゼント」であり、誕生日やプレゼントというワードが多く見られ、夫の妻への愛情や妻を喜ばそうとする姿が想像できる。しかし、「夫」では「夫　嫌い」という検索が他のワードに比べてとても多く、死んで欲しいというワードまであり、「妻」の選択肢とは非常に対照的なものであった。また、「死んで欲しい」と検索すると順に親、父親、夫、旦那、姑となっている。

次に世界の離職率について考えていく。以下は、世界 46 カ国の離婚率を表したものである。

世界46カ国の離婚率（人口千人当たり離婚件数）



（注）*は暫定値あるいは推定値。日本は人口動態統計による。
（資料）総務庁統計局「世界の統計2010」（原資料はUnited Nations, Demographic Yearbook）
米国はStatistical Abstract of the United States 2010（データのない州の推計を含んだ推定値）

上記の表を見てみると、米国とロシア、ウクライナ、ベラルーシといった旧ソ連諸国が世界の中でも高い離婚率となっている。また、キューバ、チェコといった（旧）社会主義国もこれら諸国に次いで離婚率が高くなっている。一方、日本は第 26 位とかつてより離婚率が上昇しているものの世界の中ではそう高い水準ではないことが分かるが、隣国の韓国は離婚率が上昇しており、この表では世界第 9 位とアジアの中で最高の離婚率であり、中国は 1.6 と低いが 1998 年と比較すると上昇傾向にある。

世界の中でも離婚率が低いのはラテンアメリカ諸国やイタリア等のカトリック諸国であるが、スペインは 2.8 と世界第 7 位であり、2000 年から急上昇しており社会変化が著しい状況である。

まとめ

これまで述べてきたように、私達は日常生活の中で何気なく喜怒哀楽の感情を表しているが、それは心理的な影響や身体的な影響を受けている。更に、極限状態に陥ると人は思いも寄らない思考や言動をとることがあり、身体や精神に及ぼす影響があることが分かった。また、男女の心理については福岡市内の大学生男女各 100 人にアンケートを実施することにより、浮気願望や浮気の経験の有無は男女の差はあまりないという結果が得られた。

しかしながら、様々な角度から人間の心理について調べたが、未だ医学では解明されていない部分や研究され続けている問題も多く、敢えて結論とするならば、人間にとって心理とは切っても切り離せないものであり生きていく上で必要不可欠なものであろう。

おわりに

この論文は中村学園大学短期大学部 幼児保育学科 橋本弘治研究室において２００８年から２０１１年に作成した卒業研究論文です。当研究室では卒業研究論文集を「幼児保育」と中村学園の学園祖 中村ハル先生の遺訓「努力の上に花が咲く」を組み合わせて「中村学園大学短期大学部「幼花」論文集」（以下、「幼花」論文集と記す。）と名付けております。但し、これは中村学園大学短期大学部としての正規の発行物ではありません。「幼花」論文集は当研究室にて作成した卒業研究論文の論文集です。

卒業研究論文は２００８年より当研究室のホームページにて概要のみを公開しておりました。また、「幼花」論文集は卒業生への配布を目的として、基本的には非公開を前提として、パスワード保護により当研究室のホームページよりリンクしておりました。但し、個別にお問い合わせを頂いた教育・研究機関の関係者にはご理解頂いた上でお渡しおります。

この度、２０１８年８月現在においてパスワード保護が何らかの理由で解除され、「幼花」論文集が一般公開されている事実を確認いたしました。この事実に関しまして、ホームページを公開する者として管理不行き届きがありましたことを心よりお詫び申し上げます。

これまでリンク元である当研究室のホームページより論文へアクセスされた方はご理解された上でご覧いただいていると思いますが、それ以外の経路により直接論文へアクセスされた方には誤解を生じる論文集の名称であることから、この度、この文面を「幼花」論文集のすべてに追記することにいたしました。また、これまで卒業生への配布と総合演習（卒業研究）発表会での使用を前提としておりましたので、著作権表示として「中村学園大学短期大学部」と表記しておりましたが、「お問い合わせ先」と変更しております。尚、「幼花」論文集の詳細についてはリンク元である当研究室のホームページをご覧ください。

http://www.nakamura-u.ac.jp/~hashimot/members/members.html

「幼花」論文集は保育・幼児教育を中心として、保育者を目指す学生が真摯に取り組んだ卒業研究の成果集です。当研究室としましては、この「幼花」論文集が教育・研究をはじめとして、子ども達を取り巻く環境改善の一助となることを希望しております。

上記をご理解の上、本文をご覧いただきますようお願いいたします。

２０１８年８月８日

中村学園大学短期大学部
幼児保育学科　橋本弘治